『草枕』の核心

Junko Higasa

夏目漱石は『草枕』発表に際して「ただ美しいという感じを与える」ことを目的に書いたと発言した。しかし「私は戦争に反対ですから、反戦小説を書きます」と宣言して書く作家がどこにあろう。たとえ発言の自由が認められている現代においても。

漱石は『吾輩は猫である』で徴兵制を逃れたことを告白した。欲に駆られて他人より得をしようとする社会が人間の新たな争いを産むことを牽制した。しかし時代の流れに埋没する美的道徳に属する自分の主張は「解る人にだけわかればよい」と諦めた。ロンドン留学を通じて『文學論』を成した漱石は、膨大な歴史の中で文学が社会の背景を持つことを知っている。そして藝術には「美」を描く役割があることを知っている。ところが日本の文壇は、醜い世の中をそのまま映し出す傾向へと走り出している。そこで『草枕』を書いた。漱石は『文學論』通り「真の文學」を実践した。漱石の小説は「文學の持つ手法」を駆使しつつ、世の中を美しさに導く「文學の役割」も同時発現する。「今の世の中を映し出して、欲に満ちた競争を善とするか悪とするか」を問うて人々を確実な二派、あるいは決断しかねる者を含めた三派へ分断するのではなく、画工と共に平地から山を登らせて共通の美の頂点へと案内する。山路を登りながら考えるのは画工ばかりではない。読者も一緒に山を登り考えるのである。山というのは自然界である。時に人間の力では計り知れないことが起こる。その自然の空気を吸わせて「自然界で生きる人間」を再認識させた後で、戦争に行く列車を見送るのである。「世を映すのが文學である」のは紛れもない真実である。しかし現代詩人の A 氏の言葉通り「藝術は戦争に利用されてはならない」したがって世の中を丸写しにはできない。漱石はそのことを良く知っていた。文明の便利に流される人間が作り出しそうな善から外れる世の中の軌道修正を試みた。起こる前に、起こってしまっていればそれ以上にならないために漱石は自らの筆を尽くした。それが未来へ向ける影響の発信だ。

物事は必ず二面性を持つ。正面があれば背面がある。善があれば悪がある。それらはいつも一体となっていて切り離すことはできない。特に科学が良い例だ。世界共通語になってしまった「フクシマ」の原子力問題。ここで思い浮かべるのは 21 世紀の文明未来を描いたアニメ「鉄腕アトム(アストロボーイ)」だ。核融合、ジェットエンジン、アンテナを持つアトムは名前も機能も原子力の権化だ。悪用解釈される恐れは大いにある。しかし手塚治虫氏は彼に自ら善悪を判断する頭脳と 60 カ国語を話せる声帯を持たせた。それはやはり「どこへ越しても住みにくい」世にしないためではなかったか。強力であるほど反作用も大きいことを便利に浴した人間は忘れる。科学は昔から軍事兵器と文明発展の両面で同時開発されてきた。その根底にあるのはやはり利潤だ。このように人間社会を作る神でも鬼でもない「ただの人」の欲による善悪の方向性に関与するのは文学も同様だ。科学程直接力を発揮しないとしても人の心理を誘導する作用を持つ。むしろ決まった答えがないだけに間違った解釈も生む。だからこそ藝術が戦争に利用されないために漱石は「美しい感じのする」作品を書いたのではないか。長岡半太郎に怒鳴られても古典物理学に拘った寺田寅彦も然り。原発事故の跡地には野生動植物が繁殖するという。人間が壊した自然の自己回帰は皮肉である。(2013.3.24)